

令和2年度「学生ボランティア活動体験レポート募集事業」

【優秀レポート】15件

(応募順)

整理番号	大学名	氏名	タイトル	活動分野	所属ボランティア団体名
1	新潟青陵大学	岩城 桃子	子どもの貧困に対して大学生が関わる意義	福祉	学生ボランティアコーディネーター ぼらくと
2	明星大学	潟野 萌	互いに与え・受け取りあうということ	その他(教育)	初等教育研究会 どろんこの会
3	敬愛大学	網中 弓華	「ボランティア活動から学んだこと」	その他(教育)	教育ボランティア サークル Iris
4	第一工業大学	長山 なな子	2年間のボランティア活動を通して	地域連携 (交流)	ボランティア部
5	広島大学	高見 史織	なりたい自分を見つける「きっかけ」*	その他(教育)	IYAH
6	明治大学	花塚 千紘	途上国支援を通して学んだこと*	国際交流 (途上国支援)	SHIP
7	上智大学	越村 玲巳	教育支援を通して気付いた真のボランティア*	国際交流 (途上国支援)	ASANTE PROJECT
8	筑波大学	三重野 馨	「ボランティア」とは何か	国際交流 (途上国支援)	日本マラウイ学生 団体
9	三重大学	香山 睦美	自分の好きなことで地域を笑顔に*	地域連携 (交流)	地域貢献サークル Meiku
10	上越教育大学	渡辺 春佳	ボランティア活動に取り組む意義とは*	被災地支援	A B J (Action By Juen)
11	聖心女子大学	品田 真優	「今」だからこそ気づけた思い	その他(教育)	大学公認ボラン ティア団体 M.S.S.S.
12	慶應義塾大学	酒井 冴南	アマゾン川巡回船同乗を通じて感じる医の原点とボラン ティア活動の意義*	国際交流 (途上国支援)	国際医学研究会
13	西南学院大学	樋口 歩美	西南FIWC九州で得た経験とたくさんの思い出	国際交流 (途上国支援)	西南FIWC九州
14	東京工業大学	松村 慶	ラーニングジャーニーin南三陸町に参加して	被災地支援	東工大学生ボラン ティアグループ
15	城西大学	宝蔵寺 佑樹	城山学園消毒体験	福祉	カレッジいわはな

*を付したものは特に優れたレポート(次頁に掲載)

「学生ボランティア活動体験レポート」

大学名	広島大学
団体名	IYAH
作成者（所属学部学科・氏名）	教育学部社会系コース / 高見史織

タイトル：なりたい自分を見つける「きっかけ」

「10年前の自分に会わせたい大人になろう」

これは、私が所属する社会教育団体が作成した大学生向けの勧誘ポスターに書かれたキャッチコピーだ。これを目にする度、10年前の自分に会わせたい大人になれているかと、いつも自分に問いかける。

10年前の私の得意なことは勉強だった。正確にいうとテストで点数を取ることだった。中学校のテストでは、1番を目指しており、ともに競っていた友人に負けた時は、両親や教師といった大人からその子と比べられてよく落ち込んでいた。あの頃の私は、なぜ勉強するのかなんて考えもせずに、負けられないために授業を必死に受けていたのだと思う。ある日、ペアになって互いの良いところを書こうという活動があった。他の子は「優しい」など性格に着目して書かれるのに対して、私が書かれたのは「勉強ができる」ということだけだった。このことに私はショックを受け、自分には人間的魅力はないのかなという空虚感を抱いたことを今でも強く覚えている。そんな10年前の自分に会わせたい大人…。それは、私自身が持っている良さを引き出してくれる大人だ。テストの点数だけじゃない、誰かと比べて順位が上だからというだけじゃない、もっと私の中にある何かを見つけるため、もっと正面から向き合ってくれる人、そんな大人を私は欲していたのだと思う。このことに気づけたのは、大学生活を通して取り組んだ社会教育団体「IYAH」での経験があったからだ。

社会教育団体「IYAH」は、広島にある学生を中心とした団体だ。高校生・大学生が、小・中学生に「たのしくてためになる学び」を届けることを目指しイベントの企画・運営を行っている。私は、この団体で「ぼくらの町」というイベントの企画・運営に携わった。「ぼくらの町」は、毎年夏に3泊4日で行い、子どもたちが150人も参加する大規模の宿泊イベントだ。子どもたちは「ぼくらの町」にある企業に就職し、職業体験を行うことで仕事のやりがいや協働する大切さを実感する。また、企業で働いて得たお金でごはんを食べたり、お土産を買ったりすることで、お金の大切さや経済の仕組みを知る。さらに、町議会で町の問題を話し合う、問題を解決するための法律をつくることを通して、町の在り方を子どもたちで決める政治参加も行っていく。このように子どもたちは、自分たちの手で町をつくる経験をする。「ぼくらの町」は、こうした「楽しみながら町をつくる」という経験を通して、社会に主体的に参加するための資質・能力を養ってもらうことを目的としている。

私は当日「ぼくらの町」で、役場を担当することになった。役場は行政の機能を担い、住民から集めた税金をもとにサービスを提供するのが仕事だ。私はこの企画をするにあたり、やるからには新しい業務を1つ取り入れたいと考えていた。そこで私は「町おこしコンテスト」を企画することにした。前年の反省として挙げられていた「子どもたちが町に関して意見を主張する機会が少ない」という課題を解決したいと思ったからだ。「町おこしコンテスト」では、役場の子どもたちが住民に対し、町で生活する中で不満に思うこととその解決策を募集する。その後、この解決策を役場の子どもたちが中心となって評価し、最優秀賞・優秀賞を決める流れになっている。しかし、コンテストを企画した一方で、私は不安を拭えないでいた。私が「ぼくらの町」における課題と解決策を提示しろと言われてもなかなか出

てこなかったため、子どもたちにとって難しいのも当然だろうと考えていたからだ。内心では「私たち大学生がアイデアを教える」という形になってしまうのではないかと思っていた。

しかし、当日の結果は、私が思ってもみなかったものだった。子どもたちは、私の想像よりも多くの意見を応募してくれていた。さらに、その多くは大人の私が思いつかないようなものだった。例えば、より多くの企業について知るために「ぼくらの町」をまわるツアーをやってほしいという意見があった。4日間を通し、子どもたちが就職できる企業は1つしかなかったからだ。他にも「ぼくらの町」には独自通貨である「ガバス」と「ガバチョ」があり、1ガバス=100ガバチョとなっている。食事などでこうしたお金を使う際は、お釣りがでないよう準備しなければいけない。その際、ぴったり払うことができなかった男の子が町に両替所をつくることを提案し、次の年に実現された。アイデアを出した男の子の笑顔が今でも印象に残っている。このように、子どもたちは、自分たちの町である「ぼくらの町」で生活する住民だからこそ気がつく身近な問題点をもとに解決策を考えてくれた。さらに、自らの意思で取り組んでくれていたからだろうか、コンテストで評価されたとき、心から嬉しそうな表情をしていた。子どもたちに話を聞いてみても、コンテストを通して各々が学びを見だし、自分のやったことに価値を感じているようだった。

この経験を通して私は、子どもたちのことを全く理解していなかったと気づかされた。今までの私は子どもたちに対し、大人がつくった道筋をたどってもらうような形式的な学びを与えようとしていた。しかし、子どもたちは各々が素晴らしい力を持っており、自ら学びを得ることができるのだ。子どもたちを、まっさらな白紙の状態だと捉え、大人が求める色に染めていくのが教育ではない。子どもたちが持っているそれぞれの良さを発揮するという経験を通して、自ら学びを得ていく機会をつくる、これが教育の役割なのだと学んだ。町おこしコンテストをする前の私は、子どもたちの良さを見ようともせず、自分が求める色に染めることに着目していた。そんな私は、10年前にテストの点数だけで評価してきた大人と同じだった。

10年前の私は「あなたの価値は、テストで点数が取れることだ」と大人に突きつけられたような気分だった。テストの点数以外に自分の価値を見いだせない時があった。もしかすると、教育によって求めている色で染められようとしている子どもたちが他にもいるのではないか。私は将来、中学校の教師になりたいと考えている。教師になった際、子ども1人ひとりに向き合うことで各々の良さを見つけ、なりたい自分になるための学びの手助けをしたい。このように、自分の中で新たな教育観を確立し、なりたい自分へと歩み出すことができたのも「ぼくらの町」の経験から学びを得ることができたからだ。大学の講義で理論を学ぶことはもちろん重要だが、社会教育という実践に取り組んだ「きっかけ」があったからこそ、経験から学びを見だし、なりたい自分を見つけることができた。

「ボランティア」と聞くと、他者のために貢献するというイメージが強いかもしれない。しかし、他者にはたらきかける経験から学ぶことは、なりたい自分を見つける「きっかけ」となる。その「きっかけ」から、自分の進む道が見えてくることもあるのだ。どんな自分になりたいか分からない人がいたら、ぜひ考えてみてほしい。10年前の自分に会わせたい大人はどんな大人だろうか。その答えを見つける「きっかけ」はすぐそこにあるかもしれない。

「学生ボランティア活動体験レポート」

大学名	明治大学
団体名	SHIP
作成者（所属学部学科・氏名）	法学部法律学科・花塚千紘

タイトル：途上国支援を通して学んだこと

我々SHIPは「つながりで生活を築く」というコンセプトのもと、国内外問わずボランティア活動をしています。活動の内容についても震災復興や環境美化、古民家改修から途上国支援まで多岐にわたり、その活動のほとんどを学生主体で企画し実行します。その中でも団体を代表する活動の一つに、東南アジアを中心に経済的な理由などで家が持てない人々のために、私たち自身で家を建てる海外住居支援活動があります。今年度は新型コロナウイルスの影響で実施ができませんでしたが、例年は大学の夏季および春季休業期間に派遣しています。本活動では団体内でいつ、どの国で、どのくらいの期間行くのかから学生主体で決定します。国によって建てる家の特徴や施工期間も変わってくるので、それに合わせた準備やメンバーの役割分担などについても決めたくえで派遣されます。本体験レポートでは、私がサブリーダーとして参加したカンボジアでの海外住居支援活動について述べたいと思います。

カンボジアで私たちが建築した家のホームオーナーさんは、旦那さんをなくした女性と、まだ小さい息子の二人家族でした。彼女は生まれつき足が悪いため、仕事をするのも大変なうえに、足の治療のための薬代がかさみ、家を持つことができなかつたそうです。そのため私たちが建てる家も、カンボジアの農村部で多く見られる、スコールに耐えるための高床式ではなく、段差が少ない家を建築しました。もちろん現地には重機などはなく、建築のほとんどを人力で行いました。セメントを作り、床にしきつめ、レンガで壁を積み上げました。連日気温は35度近くにまでなり、急なスコールも日常茶飯事です。現地でサポートをしてくれる大工さんは英語を話すことはできず、コミュニケーションにも苦戦する毎日でした。

そんな中、私たちが最後の家の完成まで活動を続けられたのは、私たちが作っていたのはただ住むだけの家ではないということに気付かされたからです。建築活動をしている合間に、現地のコーディネーターを通じ、ホームオーナーさんと会話したり、子供たちを交流したりする機会も多くありました。家の建築を始めてすぐのタイミングで、ホームオーナーさんにインタビューする機会もありました。そこで彼女は「この家が建つのが待ち遠しい。この家が建てば家の前で小さな商店を開こうと思っている。足が悪い私でも家のすぐそばであれば自分のペースで働けるし、子供が遊んでいるのを見守りながら働けたり、子供が学校に通い始めたらその帰りを待ちながらも働けたりもできるでしょう。」と話してくれました。この言葉を聞いたとき、私の中で家に対する価値観が大きく変わりました。

私たちがカンボジアで建てた家は、私たちが日本で住んでいる家やマンションと比べて、広さや性能で劣っている点も多くありました。そこに水道や電気を引くことはできないし、家の目の前にあるでこぼこした道をきれいに舗装することもできませんでした。ボランティア活動、特に

途上国支援をしていると自分ができることの限界や無力感を感じることも多くあります。しかし、私たちが建てている目の前の家に向き合い、その家のホームオーナーさんのために全力で取り組むことが、私たちにしかできないということだと感じました。ホームオーナーさんがどんな思いでこの家の完成を楽しみにしているのか、足にハンデがあるホームオーナーさんが求める家はほかのカンボジアの人々とも違うのだと知っている私だからこそ、このホームオーナーさんのための家を作ることができるのだと気付きました。実際、家が完成した際に、ホームオーナーさんは泣きながら喜んでくださり、別れがつかなくなるほどの感謝を伝えてくれました。

私は、ここにボランティアでしか得られない体験があったと感じます。私はこれまで、私たちの普段住んでいた家が「普通」で、そんな家に住むことがすべての人にとっての幸せだと思い込んでいたのです。もちろん広くて、耐久性があって、この先100年たってもびくともしない家に住むことができれば、安心かもしれませぬ。しかしそれがすなわち全員にとっての幸せとは限りませぬ。自分の価値観や普通だと思っていたことが、必ずしも相手にとっても同じではありません。自分の家に対する価値観が覆り、幸せにも多様な種類があるのだと学びました。

そしてそのことに気付かせてくれた貴重な出会いがあるのも、ボランティア活動で得られる大きなものの一つであると感じます。普通に大学で勉強し、アルバイトをして、休日は友達と遊ぶ、といった生活では、国籍や年齢、性別が違う様々な人と出会う機会は少ないでしょう。自分と全く違う価値観や考えに出会えることも少ないと思います。現に私は、カンボジアに行き、ボランティア活動を通して現地の人と交流するまで、家に対する価値観の違いに気付くことはできませんでした。ボランティア活動では自分と全く違うバックグラウンドを持つ人々との出会いがあります。そしてその出会いや交流が自分にとっての新たな価値観や考え方を与えてくれるのです。それが私にとってはカンボジアでの住居支援活動でした。しかしそれが他の国であればまた違う出会いや発見もあります。住居支援活動でなく教育支援や衛生支援、その他のボランティア活動であれば、今とはまったく違う新たな価値観を得られるかもしれませぬ。

家に対する価値観を変えてくれたこの経験から、私は現在ハウスメーカーを志望し就職活動をしています。日本人の中だけでも、家に求めるものは多種多様です。家の構造や間取りはもちろん、内装のデザインにも様々な要望があります。そしてその様々な要望の後ろには、家に対する価値観や未来設計の違いがあるのだと思います。カンボジアで住居支援活動をしたからこそ、家の重要性はもちろん、家のもつ可能性や価値観の多様性に気付けた私だからこそ、一人一人に寄り添った家の提供ができるのではないかと考えています。

このカンボジアでの住居支援活動を通して家への価値観が変わり、その多様性を学ぶことができました。そしてその学びがあったからこそ、私が将来に渡って取り組みたいと思う夢を持つことができました。これは実際にカンボジアという国に赴き、ボランティアという活動をしたからこそ得られた学びだと思います。これからこの学びを最大限活かして、さらに自分自身を成長させることで、また別の人を笑顔に、そして幸せにできるような人間になりたいと思います。

「学生ボランティア活動体験レポート」

大学名	上智大学
団体名	ASANTE PROJECT
作成者（所属学部学科・氏名）	総合グローバル学部総合グローバル学科 越村玲巳

タイトル：教育支援を通して気付いた真のボランティア

2019年の2月、私はタンザニアのジュリウス・ニエレレ国際空港に降り立った。これが、長年の夢であったアフリカ大陸に足を踏み入れた瞬間であった。街全体に活気がみなぎっていて、通り行く人々が、珍しいアジア人の私に対して気さくに声をかけたりウインクをしてくれたりした。女性は色とりどりの布を使っておしゃれに着飾り、制服を着た子供たちが談笑しながら下校する姿を目にした。渡航の目的は未就学児の教育支援であったため、初めて直接目にしたタンザニアの子供たちの可愛らしい笑顔に目を奪われた。何もかもが初めての経験で、ここから3週間のタンザニア滞在が非常に楽しみになったのを覚えている。

タンザニアにはASANTE PROJECTのメンバーとして行った。この団体は、タンザニアのダルエスサラームで幼稚園の教育支援を行っている。半年に1回現地を訪れ、授業サポート、物資・設備支援など様々な方向からの支援を行うことで、持続的で現地のニーズに沿った教育支援を実現させることを理念としている。日本では、現地でのプロジェクト遂行のための資金や情報集め、SNSでのタンザニアの魅力発信などを行っている。私は、かねてからアフリカ、ボランティア共に関心があったため、大学1年生の春からASANTE PROJECTに所属し、活動してきた。

私が支援に入った幼稚園（以下、T校）は、大通りから離れた住宅街の中にあり、広い敷地で子供たちが伸び伸びと遊んでいる様子が印象的である。しかし、この学校には不足しているものがいくつもあった。タンザニアでは幼稚園建設にあたって、政府の認可を得るために門、外壁、教室、キッチン、トイレが必要になる。そして、政府の認可が無いと安定して幼稚園を運営することが難しくなる。ところが、T校には外壁、門、キッチンがなく、トイレもお世辞にも清潔だとは言えないようなものであった。そこで、ASANTE PROJECTは、T校でまずキッチン建設の支援を行うことを決定した。清潔なキッチンは子供たちが毎日口にするポレッジを作るのに必要不可欠であるからだ。事前に現地の大工に設計図と建設に必要な費用の概算を作成してもらい、T校でのキッチン建設プロジェクトを始動した。私達が滞在中にキッチンが完成するように工事の日程を組み、資金をしっかりと用意し、準備は万端であった。しかし、工事は2日遅れでスタートした。私は帰国するまでにキッチンが完成するのか不安になり始めた。しかし、タンザニアンはHakuna matata（何も心配ない）と言い、非常に楽観視しているように見えた。それでも途中までは順調に工事が進んでいるようだった。しかし、結局キッチンは帰国までに完成しなかった。概算通りに材料を購入したはずなのに途中で足りなくなったり、人件費を新たに請求されたりなどトラブルが頻発し、工事が滞ってしまったのである。その時は、メンバーが必死に集めた資金で工事を進めてきたのに、タンザニアンに振り回されてばかりでやるせない思いが募った。また、彼らに教育環境を良くしようとする姿勢が足りないのではないかという考えさえ芽生えてきた。しかし、それは私がボランティアの在り方を理解していなかったからである。私は、常に心のどこかで支援してあげているのになぜ協力してくれないのかという疑

間を持ち続けていた。日本だったら概算内で材料を購入し、日程通り、むしろ早めに工事が終わるだろう。しかし、それはあくまでも日本だったら、の話である。そこはタンザニアであり、タンザニア人の国民性、時間感覚は当たり前のように日本と異なるわけであり、比べてはいけない。帰国後、メンバーとミーティングを重ねキッチン建設プロジェクトの反省点を洗い出している内に、自分たちが上から目線の支援をしていたことに気づいた。思い返せば、何でも時間通り、予定通りに進む日本と比べてばかりで、タンザニアのペースというものを理解しようとしていない自分がいた。自分が気にしていたことは後から考えれば取るに足らない小さな事ばかりで、常に Hakuna matata の精神で大きく構えるタンザニアンの方がよっぽど心に余裕があり、毎日を楽しそうに生きていた。この反省点を踏まえて、1年後の2回目の渡航では日本にいる内からタンザニアンと密に連絡を取り、事前準備を念入りに行った。そして、現地での予定も余裕を持たせて組むことで時間的にも精神的にも終始安定して活動を行うことが出来た。自分も少しはタンザニアンに近づくことが出来たと思えた瞬間だった。

初めてのタンザニアでの教育支援は自分が思い描いたようなものではなかった。しかし、それを経験しなければ、真のボランティアを見つけることが出来ず、次に繋げられなかつただろう。現地の文化、習慣を受け入れ尊重することで対等な関係でのボランティアが実現できる。国際協力とは、本来こうあるべきなのではないだろうか。1年後、再びT校に訪れた際に校長先生から「あなた達のおかげで学校が運営出来ているから感謝している」と言われ、心の底からキッチン建設を支援して良かったなと思えた。現在、コロナウイルス感染拡大の影響で現地に行くことは難しく、私は3回目の渡航が実現しないまま ASANTE PROJECT の引退を迎えることになる。教育支援を通してタンザニアから学んだことを後輩に伝え、今後の ASANTE PROJECT の活動に期待したい。そして、自分自身、忙しい日本社会の中で Hakuna matata の心を忘れずに生きていきたい。

「学生ボランティア活動体験レポート」

大学名	三重大学
団体名	地域貢献サークル Meiku
作成者（所属学部学科・氏名）	生物資源学部 資源循環学科 香山 陸実

タイトル：自分の好きなことで地域を笑顔に

「自分の好きなことや得意なことが誰かのためになる」大学のサークル活動を通してこんな素敵な経験をすることができた。

このサークルに所属を決めたのは、ボランティア活動がしたかったからというよりも、自然や動物、そして田舎が好きだったからである。私は都市部近郊の住宅街で生まれ育ち、田舎や農村とは遠いところで暮らしていた。近くに森や農地などはほとんどなかったが、ジブリが好きなこともあり、小さい頃から自然や動物が大好きだった。また、おばあちゃんっ子の私は、祖母の子どもの頃の話がとても好きでよく聞いていた。庭先で鶏やヤギを飼い、畑では野菜を育て、田んぼの広がる田舎の風景に憧れを持つようになった。それはまさに「となりのトトロ」で描かれているような田舎である。大学の入学式でもらった地域おこしサークル Meiku のピラを見たとき、私の憧れがサークル活動でできる可能性があること知り胸が熱くなった。サークル説明会で話を聞き、その後すぐに活動に参加した。

活動場所までは、大学から車で40分ほどかかる。その道のりからすでに衝撃が待ち構えていた。途中に通る山間の坂道はまるでジェットコースターのような斜面で、上りも下りも落ちるんじゃないかと少し怖かった。急カーブが何個もあり、そのたびに体が右へ左へと大きく揺れた。まさか自分がその道を車で悠々と走る日が来るとは、その時は微塵も思わなかった。サークル活動で得たことの一つに、普通の大人以上の高い運転技術を身に付けたことは言うまでもないだろう。

大学1年生の頃はサークルの活動すべてが新鮮で、何をやっても楽しかった。稲作や野菜栽培、ヤギのお世話など様々なことを体験した。初めて草刈機を使ったし、トラクターに乗って畑を耕耘した。活動場所の津市白山町上ノ村（かみのむら）は、周りを山で囲まれた中山間に位置する農村集落である。ほとんどの家庭が農地を所有しており、稲作・畑野菜・果樹など育てている。使われなくなり遊休農地となっている土地で、学生は好きな野菜を自由に栽培している。農業初心者である学生に、よく村人が栽培方法や機械の使い方を親切に教えてくれる。畑で作業をしていると気軽に挨拶してくれる村人達とのささいな会話も、私にはとても充実した時間である。私の地元は近所付き合いが希薄化しているため、田舎の地域住民の強い繋がりにも関心があった。物々交換も体験した。学生の畑の隣の家のおばあちゃんにカボチャをあげたら、ナスやトマト、さらにジュースまでくれた。

稲作はサークルの最もメインの活動である。稲作に関わるほとんどの作業を学生でしているが、特に田植えと稲刈りは一大イベントである。小さい田んぼの田植えには村の子ども達も参加し、一緒に裸足で田んぼに入り、手で稲を植えていく。土や泥に触るなんて、ほとんどの学生が小学生以来である。子ども心を取り戻したように、田んぼにダイブして全身ドロドロになる学生が毎年一人以上出てくる。大きい田んぼの田植えは、学生が田植え機を使って植えていく。手植えの後に田植え機を使うと、農業機械の偉大さを大いに実感する。大人数で時間をかけていたのが、数人であっという間に終

わってしまう。稲刈りも同様である。手刈りとコンバインとでは、その差は歴然である。活動していくうちに農業の知識や技術が一通り身についたのは当然ながら、手と機械とどちらの経験もすることで、農業の最新技術の重要性を十分に理解した。大学で農学を専攻しているが、授業以上のことがサークル活動で学べた。

このサークル活動の本当の意味に気づき、理解し始めたのは2年生の後半くらいからだったと思う。稲刈り機を貸してくれていたおじいちゃんはその年に稲作をするのをやめた。集落の担い手さんに田んぼの管理を委託した。その時初めて、集落の未来を考えた。5年後、10年後、その先を想像してみた。現在、農作業している村の年配者たちが体力に限界を感じ、農作業をする人がだんだんと減っていく。その土地を担い手さんが集約して管理することになる。しかし、集約にも限界がある。少子高齢化が進んでいる上ノ村では、新しく農地を使おうとする者、特に若者はなかなかいない。余った農地は管理されなくなれば、最悪の場合、耕作放棄地になってしまう。耕作放棄地は病害虫の発生源、鳥獣の住処など、他の農地へも悪影響を及ぼす。

空くのは農地だけでない。高齢者が亡くなり、その子どもが仕事や学校のために他地域へ出ていき戻ってこなければ、空き家がどんどん現れる。そのうち限界集落になり、いつかは集落自体がなくなってしまうかもしれない。上ノ村のような地域は日本中にいくらでもあるだろう。そう考えると、その先どうなるかは想像に難くなかった。過疎化や少子高齢化などの社会問題は、大学生の私にとってはどこか遠い存在に思っていたが、一気に自分事を感じた。

それまでは活動自体が楽しく、本来の活動の意義を見逃していた。学生が楽しんでやっているタケノコ掘りは、村人からしたら土地を守るための大切な機能であった。毎年春に出てくるタケノコを放置すれば、あっという間に竹林へと化す。食べるため以上に、竹の侵入を防ぐことがタケノコ掘りの重要な役割であった。学生が遊休農地で野菜栽培することで、村人の草刈りの手間がなくなり負担が減る。耕作放棄地の防止になる。ヤギの飼育は遊休農地の活用、ヤギの散歩などしながら住民同士の交流の場にもなる。休耕田で稲作することで田んぼの持つ多面的機能を維持できる。学生の多くの活動が、上ノ村の農地の維持や集落としての存続に貢献していた。

私たち学生の活動がただの趣味や楽しみで終わるのでなく、上ノ村のためになっていると気づいたときはすごく嬉しかった。気づくまでに時間がかかったのは、おそらくこのサークル活動が始まってからすでに4年経っていたことが関係しているだろう。活動初期のメンバーは問題意識を持って活動に取り組み始めたが、その後、サークル員は毎年入れ替わっていく。活動内容が定着すると、私のように活動内容のみにつられて参加し始める者が増えてくる。そこに、地域貢献の意識はあまりないことが多く、そのまま気づかず卒業してしまうこともある。活動に参加するだけでも身につくことは沢山あるが、意識が変わればもっと得られることがある。そのことを他のメンバーにうまく伝えることができなかつたことだけが、私のサークル活動の心残りである。

だからこそのレポートにまとめた。学生が上ノ村で好きな活動をすることが、集落のためになっている。このような素敵な体験を全国のもっと多くの学生にしてほしい。それは、私のようにある農村集落で農業などすることかもしれないし、全然違う別のこともかもしれない。大学生は若くて自由に、何でもできるパワフルさがある。ぜひ、色んなことに挑戦してほしいが、その時に少しだけ、周りの人にどんな影響を与えるかを考えてみてほしい。するとそこには素敵な関係があるかもしれない。そして、これまで“他人事”だと思っていたことが、突然、“自分事”になるかもしれない。

「学生ボランティア活動体験レポート」

大学名	上越教育大学
団体名	A B J (Action By Juen)
作成者 (所属学部学科・氏名)	大学院 学校教育研究科 教育実践高度化専攻 渡辺 春佳

○ボランティア活動に取り組む意義とは

私たちの団体は、2011年の東日本大震災の年に発足しました。それから毎年、学内や周辺市教育関係者等に周知して参加者を募り、被災地の宮城県に足を運び、被災された地域の手伝いをはじめ、震災当時のことや被災地の現状を学び、震災を伝え続けることを目標に活動を継続してきました。また、近年は宮城県に限らず、台風による洪水被害に遭われた熊本県や長野県へ赴き、ボランティア活動を行ってきました。

何度も被災地へ足を運び、ボランティア活動に参加することで、ボランティア活動の意義が見えたように思います。私が考えるボランティア活動の意義は、実際に見た光景や、そこで感じたことから自分だけしか語れない学びに繋がれることだと考えています。私や他の学生も、災害被害の大きさをテレビのニュースやSNSで見て「被災地のために何かをしたい」「力になりたい」と思い、ボランティア活動へ参加をしてきました。しかし、ボランティア活動後の学生の感想を聞くと、「自分1人だけの力ではどうすることもできなかった」「達成感というよりもモヤモヤした感情が残る」など、ボランティア活動の前後で気持ちに変化のあった学生が多かったです。私も同じように感じていました。そして、活動後に気づき、考えたことや感じたことを仲間と共有した時に出てきた言葉こそが価値ある気付きであると感じました。実際の現場に入ってこそその空気感にふれ、体を動かして作業をしていると、様々な感情が生まれてきます。そうした感情を振り返り、深掘りすることで自分だけの生きた学びとなり、誰よりも説得力のある経験となるのだと考えています。ここで、ボランティア活動の意義に変化が起きた2つの活動を紹介します。

●宮城県石巻市の雄勝ローズファクトリーガーデンでの活動

宮城県石巻市にある雄勝ローズファクトリーガーデンは、東日本大震災の津波で壊滅した石巻市雄勝町を「花と緑の力」で復興するために、被災した住民が立ち上げた復興プロジェクトです。私たちのサークルでは、毎年夏にこのガーデンに訪れ、主に草刈りやラベンダーなどの花の手入れなどを中心に活動しています。暑い中での活動で大変ではあったのですが、年々綺麗になっていくガーデンを見ると達成感を感じました。

しかし、よく考えると私たちは年に1度だけの活動ですが、このガーデンの代表であるご夫婦は毎日続けています。クーラーの効いた部屋でのテレビ越しでは、暑い中の作業や手入れの大変さに気づくことはできなかったと思います。毎年、綺麗に咲く花たちを当たり前の光景のように思っていました。ご夫婦の努力があってこそその姿なのだ改めて気づくことができました。しかし、このことに気付くようになったのは、1年目ではなく、3年目のことでした。それまでは、綺麗になったガーデンを見て達成感を感じるだけでしたが、3年間の間に、様々なボランティア活動に参加しながら大学の先生方や仲間、ボランティア先の方達と感じたことや学んだことなどを活動後に必ず振り返り、所属するサークルのメーリングに言語化して送ることで変化が起きました。感想を共有すると自分が気づけなかったことを気づかせてもらえる機会になります。暑い日も寒い日も活動を続けるご夫婦はどんな気持ちでいるのか、毎年綺麗なガーデンがあるのは当たり前のことなのかどうかなど、お互いに気づきを出し合って深掘りして考えるということをやってきた結果、活動をただこなすのではなく、様々な視点か

ら学ぶ姿勢を獲得したのだと思います。そして様々な視点から見るできるようになったことで、このご夫婦の姿から、復興への想いを行動へと繋げ、「継続していくこと」で誰かに震災を絶対に風化させないという強いメッセージを送ることができるのだと気づくことができました。

●岡山県での活動

2018年の西日本豪雨の被害に遭った岡山県真備町へボランティア活動に2泊3日に出向きました。道路脇にはないはずの家具が流されていたり、家屋の1階部分が空洞になっていたりと、被害の甚大さに驚くことばかりでした。私たちは主に、ボランティアセンターの物品搬入のお手伝いと、中学生への学習支援活動を行いました。特に印象に残っているのが、ボランティアセンターの物品搬入のお手伝いです。生活に最低限必要な物品や食品などが並べられていました。私も陳列の手伝いで1種類のカップラーメンを並べていたら、センターの方に「カップラーメンは2種類以上一緒に出してね。こんな状況でも選択できる満足感を得ることができるか」とアドバイスをいただきました。日常とはかけ離れた状態の中でも、常に被災者の気持ちに寄り添い、陳列の仕方を工夫している姿が印象的でした。どんな状況でも、できることがあるなら実行する、その時の最善を尽くすことが大事であることを学びました。私も一緒に行った仲間も、ただの陳列作業であったのが、被災者を思いやる気持ちを持ち、商品を綺麗に並べたり、1つ1つの商品が見やすいように並べたりと工夫して行うようになるなどの変化が見えました。

この他にも新たな視点を学ぶことができました。帰りの電車の中で、学生同士でこの活動を振り返ったときに、ボランティアに行った私たちもこの災害を忘れてしまわないかという話が出ました。テレビでも災害から時間が経ってしまえば、報道も少なくなり注目も浴びなくなってしまう。甚大な被害ですら、人々の記憶からも忘れ去られてしまう可能性もあります。そういった可能性に気づいた時、実際に現場に行った私たちだからこそできることもあると考え、企画したのが大学祭でボランティア活動を報告することでした。多くの人が集まる機会に、現在も日常とかけ離れている方たちの生活や、洪水被害の恐ろしさを伝えようと意見を出し合い、実行に移しました。学生同士の振り返りと、現地で出会った方との会話から得たこと、考えたことを形にできたことが何より嬉しい瞬間でした。

上記二つの活動から、ボランティア活動を通して実際の被災地の現場を体験することに加えて、そこで感じたことを学びにつなげたり、行動に移したりできるのがボランティア活動の素晴らしいところだと考えています。たった1日、2日の短い時間のボランティア活動ではありますが、回数を重ねていく中で先生方や仲間、ボランティア先で出会った方たちと考えを交流したからこそ、得られることや学べるものがたくさんあることに気づくことができました。

そして現在、コロナ禍で活動が制限されている中で、「行動にうつす=Action」ことがより大切であることを感じています。先の見えないコロナの時代だからしかたないと考えるのではなく、大学の掃除や募金活動など身近な活動に目を向けるとまだまだ自分たちにできることが多くあることに気づきました。ある学生は、大学内を散歩すると意外と落ちていたゴミが多いことに気付いて、掃除する場所の候補を挙げ、実際に私たちは美化活動を企画し、実行に移しました。掃除中にも、お互いに大学寮の清掃員の方達の大変さ、分別ができていなかったことへの反省などについて話をしながら活動をしていました。活動をしながら自分の考えを交流する風土が着実に継承されていると感じています。これからもできることを発見して行動に移し、一つでも学びの多い時間にできるように、考えを交流する機会と振り返る機会を設けることを大切に仲間と前進していこうと思います。

「学生ボランティア活動体験レポート」

大学名	慶應義塾大学（医学部）
団体名	国際医学研究会
作成者（所属学部学科・氏名）	医学部医学科 酒井冨南

タイトル：アマゾン川巡回船同乗を通じて感じる医の原点とボランティア活動の意義

ブラジルには日本と全く異なる状況下で限られた医療資源を最大限に有効活用しようと懸命に取り組まれている医療が存在する。慶應義塾大学医学部国際医学研究会は、このような医療を実体験することで「医の原点」について考えを深め、医師としての素質を養うことを目標として活動している。

具体的には、私達はアマゾナス州マナウスにおいてアマゾン川流域の無医村をめぐる保健局巡回船に同乗し、プライマリケアの実施をした。この医学的ボランティア活動を通して、人との繋がり的重要性や文化と医療の結びつきを肌身で感じる事となった。

アマゾン川巡回診療船同乗実習では5日間に渡り合計7つの村を回るが、この実習中にまず感じたのは言語の壁だ。殆どポルトガル語しか通じない中、現地の方と会話をしながらアンケート調査を行ったが、はじめはなかなか上手くいかず私達の心の中には少しずつ不安な気持ちが募っていった。しかし、そんな状況の中で、私達に関わって下さった方々は陽気で、そして親切な方ばかりであった。そして、だんだんと馴染むことができ、日本とブラジルお互いの国や文化について語り合えるようになった。短い交流の期間であるにもかかわらず、それはまるで心からの友人が何人も出来たようであった。文化的背景も全く異なる人々とこんなにも楽しく会話できるのは、ブラジル人が陽気でおしゃべり好きだからだ、と勝手に決めつけていたが、今考えてみるとこれは日本人の考え方で、彼らは人種や国籍などの違いなんて気にせず、目の前にいる人をただ一人の人間として接しているだけなのかもしれない。現在の日本では、人と人との関係性がますます希薄になりつつあるように感じるが、ブラジルの人々の様に目の前の人間と向き合い、コミュニケーションの本当の形を思い出すべきでないだろうか。一人の力では成し遂げられないことも協力すれば成し遂げられると思うからだ。このアマゾン川の巡回診療実習は、忘れていた一番大切なことを思い出させてくれた、そんなボランティア活動であった。

一方で、医療のあり方について考えさせられる体験もあった。ブラジル国内にはいくつもの先住民がいるが、それぞれの民族によって文明の発達度合いは変わってくる。現代文明が浸透してきたことで生活様式が変化しつつある。確かに、バイクを乗る村人もいるし、テレビがある家もあれば、冷蔵庫を開くとジュースとお酒があるなんてこともあった。特にその食生活の変化によって、糖尿病や高血圧の患者が増えていることを耳にした。人によっては食生活や生活習慣が変化していることに対して悲しい目を向ける人がいる。独自の食生活や生活習慣を守るべきだというのだ。確かに伝統的な文化を守って欲しいと思うし、第三者の介入によって伝統や文化が変化、衰退していくことは許せない。しかし、新たな文化や生活を取り入れ、伝統文化をどうしていくかということは彼ら自身で選択

して行って欲しいと強く思った。ただ、文化が変容しつつある彼らに対して病気や身体への理解を促すことの重要性もその時感じ、「医療」と「文化」の結びつきに改めて気づかされた。このようにアマゾンに住む彼らに対する医療は日本の大学病院とは全く違うもので、今まで見てきた医療が世界の「常識」ではないことに現実味をもって直面した。しかし、この活動を通じて医療を受ける権利は誰しも平等であってほしいという思いもさらに強くなった。悲しいことだが、平等にあるはずの権利が全ての人々に行き届いているかという点を決してそうではない。けれども、そういった世界であるからこそ、その地域に根差した文化や生活状況に応じて、限られた医療資源を最大限活用しベストな医療の選択をしていくことの重要性を感じた。そのためには固定観念や既存の知識だけに捉われない「常識」を打ち破る覚悟も時には必要であると思った。

今日、かつてない国際情勢の緊迫化や地球温暖化をはじめとする環境問題への関心の高まりなどから、世界は大きな変革の時期を迎えている。世界各国間の距離が縮まった現代では、開発途上国の政治的・経済的発展をなくしては先進国の発展は望めず、また人道的・道徳的見地からも開発途上国への積極的な援助が求められている。このような背景の中、日本が国際社会に対して更なる貢献をしていくためには、先進国のみならず開発途上国や新興国との間において、政治・経済・文化・科学・医療などの多彩な分野での国際交流を通して、多様な価値観を持つことが重要であると考えられる。一方で、これらの医療先進国が過去に経験した医療問題を、未解決のまま抱える医療開発途上国も数多く存在するのもまた事実である。逆に医療先進国では輸入感染症に悩まされることも多く、我が国を含む先進諸国は、こうした医療開発途上国との相互理解を深め、積極的に援助を行うことが求められている。

このような見地から、将来の日本の医学・医療を担う医学生が、多様な国際的要望に応えることのできる幅広い視野と積極的な行動力を身に付け、国際社会に通用するコミュニケーション能力を養うことは大変有意義であることは間違いない。医療ボランティアをせずに日本に留まっていたならば、私達は世界には本当に種々の価値観があるという当たり前の事にすら気が付かずに医師をしていたであろう。中には欧米や日本の医療の常識のみでは完全には理解することの出来ない価値観もあるはずだ。しかし、「分からないことがある」という事が「分かる」のは、医の原点に触れたものだけが得られるかけがえのない感覚である。日本と社会情勢や医療事情の大きく異なる開発途上国や新興国での医学的ボランティア体験は、医の本質を再認識し、医師としての新鮮な感覚と深い洞察力を体得する契機として意義深いと考えられる。